

資料5

報道発表資料
平成29年10月19日
気象庁

霧島山（新燃岳）の火山活動に関する火山噴火予知連絡会拡大幹事会見解

霧島山（新燃岳）では、当面、火山灰を噴出する噴火活動が継続すると考えられます。また、今後、多量のマグマが新燃岳直下へ供給されれば、規模の大きな噴火が発生する可能性もあります。

霧島山（新燃岳）では、10月11日05時34分頃に山頂の火口から噴火が発生し、17日未明まで概ね連続的に噴火が続きました。

噴煙の高さは、開始当初の火口縁上数百mから12日以降は高まり、14日に2,300mが観測されています。これまでのところ、大きな噴石の火口外への放出や火砕流はみられず、火山灰を噴出する活動が続いています。火山灰の放出量は、16日までで数十万トンと見積もられています。一時的に日量1万トンを超える火山ガス（二酸化硫黄）の放出量も観測されています。火山灰の付着成分の分析から、高温のマグマに由来する火山ガスが関与したと考えられます。

この噴火に先立ち、今年7月頃から霧島山を挟むGNSS基線で、霧島山の深い場所での膨張を示すと考えられる伸びの変化が続いています。また9月下旬から新燃岳の火口直下付近で火山性地震が増加しました。その後、10月9日に傾斜変動を伴う火山性微動が発生し、10月11日の噴火に至りました。この傾斜変動は、新燃岳の北西数kmの地下深くにあると考えられるマグマだまりの収縮と、新燃岳付近のわずかな膨張を捉えているという解釈も可能です。

噴火開始後には、低周波の微動や地震の増加もみられます。また、緩やかな傾斜変動が9日の微動以降、16日頃まで継続しました。

以上のことから、今回の活動はマグマが関与した噴火であると考えられます。

2011年の新燃岳の噴火活動では、1月26日から31日にかけて多量の火山灰と軽石、溶岩を噴出するマグマ噴火が発生し、その後、大きな噴石を飛散する噴火が数カ月間断続的に発生しました。この活動の中で、急激な収縮がみられたマグマだまりは、その後に収縮前と同程度に回復していると考えられます。

当面、火山灰を噴出する噴火活動は継続すると考えられます。また、現在も地下深くのマグマだまりにはマグマが蓄積されていると考えられ、今後、多量のマグマが新燃岳直下へ供給されれば、規模の大きな噴火が発生する可能性もあります。